

校長先生の初恋物語

第6話 きんに君をたすけたのは

「ボキッ。」といういやな音。その音で、きんに君に何が起こったのか、すぐに分かりました。足の骨が折れてしまったんです。

それまできんに君の回りで大笑いしていたみんなは「ひゃーっ。」と悲鳴を上げました。悲鳴に続いて、きんに君は「ぎえーっ。」とうめき声を上げました。

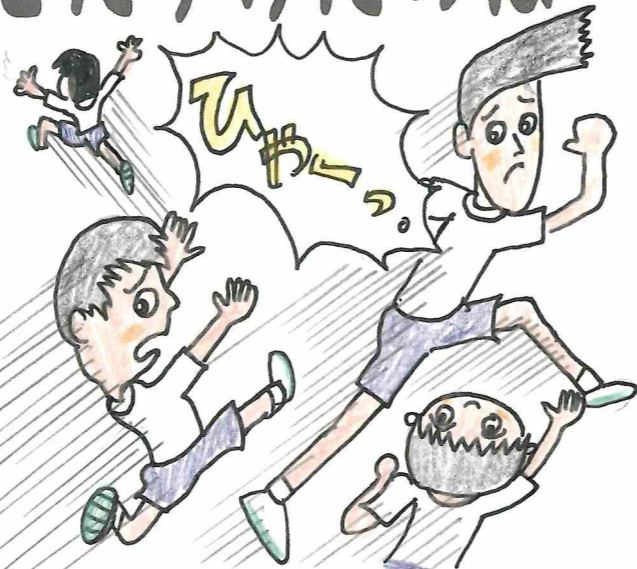


きんに君の右足は、ありえない方向に曲がっていました。きんに君は、顔をゆがめて、鼻水を垂らしながら痛がっていました。顔は血の気がなくなりひどい色。体全体がブルブルと震えていました。

大笑いしていたみんなは、いつの間にかいなくなっていました。無理もないです。きんに君のひどい足を見たら、どうしたらいいのか分からないのです。みんな教室から出て、ろうかにいました。

とっくんはすぐに、足長君をさがしました。学級委員の足長君なら、頼りになる足長君なら、きんに君のピンチをなんとかしてくれるはずです。ところが、ついさっきまで、他の男の子と一緒にきんに君のパフォーマンスに大笑いしていたのに、もう教室の中にはいません。みんなといっしょに、ろうかに逃げていました。

そんなきんに君のピンチに、とっくんはみんなといっしょにろうかに逃げたりしなかったのです。ふしぎと、とっくんは力がわいてくるのです。「ぼくがきんに君を助けるんだ。」そんな気持ちになっているんです。きっと、ダンプさんの、あの1票が、とっくんの背中を押してるん



です。4年生までの弱虫とっくんだったら、だれよりも早くろうかに逃げてしまっていたでしょう。足長君よりも先に廊下に逃げてたかもしれません。

とっくんはきんに君に近づき、きんに君を抱きかかえました。体の小さなとっくんですが、なんとかきんに君を抱きかかえることができました。

「きんに君、ぼくが保健室までつれていってあげるよ。」

きんに君をはげまし、歩き出しました。

しかし、きんに君は筋肉もりもりです。筋肉のかたまりは重たいのです。小さなとっくんは、ヨロヨロしながら、少しずつしか前に進めません。それだけじゃなくて、とっくんが一步前に進むたびに、きんに君は「ウェーッ。」「ぐえーっ。」「ホゲーッ。」「アジャーっ。」と、苦しそうにさけぶのです。本当につらそうでした。

きんに君を抱えたとっくんの後ろから、クラスみんながちょっとはなれて、ぞろぞろついてきました。足長君もこわごわついてきました。だれもとっくんの手助けをしようはしませんでした。仕方ないと思いました。きんに君の折れて曲がった足を近くで見ることができないのです。でも、その中の一人、かねあり君が、ようやくとっくんに協力してくれました。

「ぼく、職員室に行って、よろひげ先生を呼んでくるよ。」
そう言うと、かねあり君は廊下を走って行きました。かねあり君の行動により、ようやくみんな目が覚めた感じになり、次々に協力してくれました。とっくんの前にたち、他のクラスみんなをどかしてくれたり、階段があることを教えてくれたり、みんながとっくんに協力してくれました。

でも、とっくんにも限界があります。保健室まではまだまだ遠いマンモス小学校の廊下で、ついに力尽きて、抱きかかえているきんに君を落としてしまいそうになるのです。きんに君を落としてしまったら大変です。折れた足が、もっとひどいことになってしまうかも。必死にこらえるとっくんでしたが、ついにこらえきれなくなって、手に力が入らなくなって、きんに君のことを……。つづく

体力の限界がきたとっくんがいるのは、階段の途中。こんなところで手をはなしてしまったら、きんに君は階段から転がり落ちてしまうぞ。きんに君はどうなってしまおうんだ。

次回予告 ヒーローはだれだ

